



標準的神経治療

しびれ感

日本神経治療学会 監修

福武敏夫, 安藤哲朗, 富本秀和 編

●A5 頁144 2017年4月

定価: 本体3,400円+税

[ISBN978-4-260-03018-2]医学書院刊

本書は日本神経治療学会が作成する標準的神経治療シリーズの中の一冊で、福武敏夫先生(亀田メディカルセンター神経内科部長)、安藤哲朗先生(安城更生病院神経内科部長)、富本秀和先生(三重大大学院教授・神経病態内科学)の編集による。“しびれ感”といった日常診療で頻繁に遭遇する症状を主題にした診断や治療の標準化の試みはユニークである。本書では、“しびれ感”の病態機序や検査について述べた後、“しびれ感”を呈する神経疾患の概要とその治療について解説しており、知識の整理や診療の実践に役立つ。

総論部分では、神経症候学や神経生理学のエキスパートが、“しびれ(感)”の概念、解剖・生理学、評価方法について語っており、大変興味深く参考になる。“しびれ”という日本語には感覚異常と運動麻痺の両者が含まれること、本書が対象とする感覚異常としての“しびれ”(=“しびれ感”)においても具体的表現(訴え)にはさまざまなものがあり(“じんじん”“びりびり”など)、それらの背景となる原因や病態生理も多様であることなどがわかりやすく解説されている。最もコモンな訴えの一つである“しびれ”についての問診や診察のコツが、基礎になる解剖や生理学を踏まえて理解される。“しびれ感”を訴える患者さんの神経診察時にみられるさまざまなサイン(徴候)について、診断上のエビデンスレベルが示されている点も画期的である。

各論部分では、“しびれ感”の主要な原因疾患を取り上げている。脳梗塞・脳出血、頸椎症、腰部脊柱管狭窄症、多発性硬化症・視神経脊髄炎、Parkinson病、

restless legs症候群(RLS)、筋萎縮性側索硬化症、脊髓空洞症、糖尿病性神経障害、Guillain-Barré症候群(GBS)、慢性炎症性多発ニューロパチー(CIDP)、small fiber neuropathy、遺伝性ニューロパチー、アミロイドニューロパチー、腕神経叢障害、手根管症候群・外側大腿皮神経障害・足根管症候群などが含まれる。それぞれの疾患について、病態から臨床の特徴、診断、治療までまとめられ、可能な範囲で治療法のエビデンス・レベルや推奨度が示されており、診療の参考になる。

本書のテーマである“しびれ感”を主軸に、疾患ごとにみられる症状を見直すと、患者さんが訴える“しびれ感”の意味するものに大きな違いがあることが改めて浮き彫りになる。例えば、RLSの項で指摘されているように、RLSでみられる下肢の内部に存在する、動きのあるような異常感覚は、患者さんが“しびれる”と表現する場合でも、それは本来の“しびれ感”ではなく、患者さんは自分の感じる異常感覚を“しびれ感”に喩えているだけである。また、総論部分で解説されているように“しびれ感”と“痛み”は本来、異なって分類されるべきものであるが、実際には“痛み”を伴う“しびれ感”であることが多く両者を区別することは困難で、両者が一体となった症状を訴える。さらに、本書の末尾には、“痒み”についての優れた解説がある。疾患や病態ごとにみると、“しびれ感”および類縁の症状の基盤となっている病態生理にはまだ不明な点が多く、今後、それらの解明がよりよい治療法につながることを期待される。